

## 6 前半で舞台を整え、後半の情を引き出す

冬夜独酌

とうやどくしやく

N・A女

大寒風雪満窓霜。  
 冷氣侵肌夜正長。  
 不耐擁爐開濁酒。  
 醉中心自到仙郷。

たいかん ふうせつ まんそう  
 大寒の風雪 満窓の霜

れいき はだ おか  
 冷氣 肌を侵して 夜正に長し

たえ ぞう しろ  
 耐えず 爐を擁して 濁酒を開く

すいちゆう こころ おのずか せんきよう いた  
 酔中心は 自ら仙郷に到る

【訳】冬の夜のひとり酒／大寒の時節に大吹雪が起こり、窓にはびっしりと霜がはりついている。そんな時は、冬の冷え冷えとした空気が肌にしみ入り、夜が本当に長く感じられる。寒さに耐えられずに、火鉢にありながら濁り酒の壺を開けば、ほろ酔い気分の中で、心は自然に俗世間を離れて仙人のいる世界に遊べるかのような心地になるのだ。【語釈】大寒＝二十四節気の一つ。一年中で寒さが最も厳しい時期で、旧暦では十二月半ば頃、新暦では一月二十日頃。擁爐＝火鉢に当たる。

この詩は、冬の夜に一人酒を飲んで暖を取る様子を詠じたもの。まず起句に問題あり。「大寒風雪」とあっても、この「大寒」が二十四節気の「大寒」をさしているのか、「大変寒い」という意味の語なのかかわかりにくい。さらに「風雪」と「霜」とは同種のものであり、一句の中に似たようなものを混在させては詩としての味わいが薄くなる。ここは、窓一杯に降りた霜に焦点を絞ってこれを際立たせるようにする工夫が必要。そこで上四字を「月輪斜照」（月の光が斜めに照らす）と改め、月光によって霜がきらきらと輝いている様子を表すようにすれば、ぐっと印象的な場面となるのである。

転句も原案のままでは落ち着きが悪い。冒頭の「不耐」は、訳に「寒さに耐えられず」とあるように、一句前の承句をうける言葉として作者は用いている。しかしこのままでは、「不耐」は下の句にかかり、「爐を擁し濁酒を開くのに耐えられない」と、反対の意味になってしまう。そこで「不耐」を「最好」（最も好<sup>よ</sup>し）と改めよう。こうすれば、寒い時に暖を取るにはこれが最良だと強調できる。また、樽を開くならともかく、「酒」を「開く」というのもおかしい。ここは実際に酒を酌むことにして動きを出すときよい。ただし「酌」字は仄声であり、これを用いると下三連（仄三連）になってしまうので、平声の「斟」（音シン）字を用いる。最後に、結句の「心自」では今一つパンチが足りない。ここは「不覺」（いつの間にか）に改め、酒を飲んでいる

と知らず識らずのうちに仙郷に遊ぶ心地となる、という方向にするのがよからう。

## 冬夜独酌

とうやどくしやく  
冬夜独酌

月輪斜照満窓霜  
冷気侵肌夜正長  
最好擁爐斟濁酒  
醉中不覺到仙郷

げつりん なな て  
月輪斜めに照らす 満窓の霜  
れいき はだ おか  
冷気肌を侵して夜正に長し  
もつと よほ  
最も好きは爐を擁して濁酒を斟む  
すいちゆうおほ  
醉中覚えずして 仙郷に到る

【訳】冬の夜のひとり酒／月の光が窓いっぱい降りた霜を照らせば、冬の冷え冷えとした空気が肌にしみ入り、夜が本当に長く感じられる。そんな時に寒さを凌ぐ最もよい方法は、火鉢にあたりながら、そこで温めた濁り酒を飲むことだ。そうすれば酔った中、いつの間にか自然に俗世間を離れて仙人の世界に遊べるかのような心地になるのだ。

## 直伝

前半は舞台装置。与えられた題意に添い、季節、時刻、場所などを按配して、後半の情を引き出す用意をする。